

2025. 3. 30 (日) ルカ 23 : 32 ~ 43

23:32 ほかに二人の犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために引かれて行った。

23:33 「どくろ」と呼ばれている場所に来ると、そこで彼らはイエスを十字架につけた。また犯罪人たちを、一人は右に、もう一人は左に十字架につけた。

23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた。

23:35 民衆は立って眺めていた。議員たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。」

23:36 兵士たちも近くに来て、酸いぶどう酒を差し出し、

23:37 「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と言ってイエスを嘲った。

23:38 「これはユダヤ人の王」と書いた札も、イエスの頭の上に掲げてあった。

23:39 十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。

23:40 すると、もう一人が彼をたしなめて言った。「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。」

23:41 おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」

23:42 そして言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」

23:43 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

<説教>

先主日には、十字架の刑場に向かって歩まれたイエスと、そのイエスの後について行った二種類の人々の姿を見ました。

一つは無理矢理に十字架を背負わされた人、クレネ人シモンでした(26)。彼については、「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」とのイエスのみことば(ルカ 14:27)のとおり、後にイエスの弟子となり、彼自身だけでなく、彼の家族もイエスの弟子になったであろうことを考えました。

イエスの後について行ったもう一つは、民衆とエルサレムの女たちの大きな一群でした。この女たちはイエスのことを嘆き悲しむ女たちでしたが、イエスは彼女たちにイエスを拒み受け入れない人々に対する神の厳しいさばきを警告し、イエスへの信仰と悔い改めを求める説教をなさったのでした(27-31)。これはイエスの「預言者」としてのお働きと言えると思います。

続く本日の聖書箇所には、刑場に着いたイエスが十字架につけられた場面が記されています。そしてここにも、前回見たのと同じように、十字架につけられたイエスを中心として、イエスに関わる何種類かの人々の様子(その態度やことば)をルカは記しています。

まずイエスの左右で十字架につけられた(二人の犯罪人)です(32-33)。もしかしたら

彼らはあのバラバ(23:18-25)につき従って捕らえられていたのかもしれませんが。彼らについてはすぐ後で再び記されます(39-43)。

そして十字架につけられたときのイエスのみことばをルカは記しました(34)。これはルカの福音書だけに記されているみことばです。これはおことばの通り、イエスを十字架につけた人々の罪の赦しを父なる神に願われた、とりなしの祈りです。イエスは〈自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われ〉(Iペテロ 2:24)、〈私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物〉(Iヨハネ 2:2)として、ご自分の〈傷もなく汚れもない子羊のような…尊い血〉(Iペテロ 1:19)を流して死なれ、ご自分を父なる神にお捧げになる、そのために十字架につけられたのです。〈このキリストにあって、私たちはその血による贖い、背きの罪の赦しを受け〉(エペソ 1:7)るのです。〈キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。〉(ピリピ 2:6-8)。このように、イエスの十字架の死、その意味、目的は、私たちの罪を赦すことでした。このイエス・キリストの十字架の死、父なる神への完全な従順、それだけが私たちの罪の赦しの唯一の基、根拠です。クリスマスの夜にこの地上に人としてお生まれになって以来、十字架で血を流して死なれるまでの、父なる神への完全な従順をイエスはお捧げになろうとしておられました。そんなご自身に免じて彼らの罪を赦してくださるようにとイエスは父なる神に祈り、とりなしをなさいました。これはイエスの「祭司」としてのお働きと言えるでしょう。

イエスを十字架につけた〈彼ら〉の罪は何だったのでしょうか。もちろん、イエスを十字架につけたことそれ自体が罪でしたが(使徒 2:36 他)。「彼らは、自分が何をしているのかが分かっていない」と言われました。イエスが生ける神の子、神の約束のキリスト、罪からの救い主だと分からない。分かろうとしない。それが不信仰の罪であることが分からない。今はイエスを裁いているが、実はイエスこそが真の最終審判者であられ、自分たちの不信仰が裁かれる(先にイエスが警告なさったように)ことを知らない。そんな「無知」の罪に彼らが気づき、認め、イエスを信じて、悔い改めるようにとイエスは祈られました。そんなイエスのみこころによって使徒たちが説教したことは使徒の働きに記されていることでした(使徒 3:17-19。7:60 等)。

しかし、そんなイエスのあわれみ深いとりなしの祈りを聞きながらも、ユダヤの〈民衆〉〈議員たち〉、そしてローマの〈兵士たち〉の態度は、「あざ笑い」「蔑み」だけでした(35-38)。彼らは特に「自分を救え」と要求しました。決して「私を救ってください」とか「罪人の私をあわれんでください」(cf.18:13)とは言いませんでした。

そんな中で唯一人、そのように言う人が現れました。それが〈二人の犯罪人〉のうちの一人でした(39-42)。彼は仲間の罪を指摘しましたが、それは罪の審判者なる神への恐れ告白でもありました(40)。また、自分の罪を認め、その刑罰を当然のこととして受け入れました(41a)。一方、イエスには刑罰を受けるべき何の罪もないことを告白しました(41b)。そしてイエスにあわれみを、救いを求めました(42)。自分の罪の赦しを乞い求めたのです。彼はイエスを自分の「王」としても認め、告白しました。(〈御国〉の直訳は「あなたの王国」です)。札に書かれた〈ユダヤ人の王〉(38)とは、兵士たちにとっては

イエスをあざ笑うネタでしかありませんでした。しかし彼はイエスを「王としてご自分の王国と権威を持っておられるお方」と「分かった」のでしょうか。彼はどのように自分の罪の赦しを、救いをイエスに求めることができたのでしょうか。それは「父よ、彼らをお赦しください。」というイエスのとりなしのみことばを聞いたからだと思います。その「彼ら」の中に罪深い自分も含まれている、いやあわれみによって含めていただきたいと心から願ったのでしょうか。そしてイエスのその祈りを聞いて、そのように神にとりなし祈ることができるお方なら「この方は悪いことを何もしていない」と信じることができたのだと思います。更に彼はどのように神を恐れ、神のさばきを認め、自分の罪を認めることができたのでしょうか。それは、彼（ら）が〈イエスとともに死刑にされるために引かれて行った〉(32)、そのとき、あの〈エルサレムの娘たち〉に対するイエスの警告のみことばを聞いて、それを他人事ではなく、自分事として受け取ったからだだと思います。やっぱり、イエスのことが分かり、それ故イエスに依り頼み、また自分の罪を認め、神を恐れ、神に赦しを乞い願う信仰は、イエスのみことばを聞くことによるのです。そしてただ神のあわれみ、恵みによるのです。

イエスは彼に、恵み深く、あわれみ深く答えてくださいました(43)。彼に罪の赦しを宣言し、神の地獄のさばきの免除を宣言し、反対に「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」と約束してくださいました。〈今日〉とはこの後何時間か経って死んだら、というよりむしろ、今、十字架につけられているこの時から、イエスに信頼し、悔い改め、イエスの十字架の贖いのみわざ故に罪赦されたその瞬間から、というべきです。イエスが私とともにおられるところ、そこが私が生きるにしても、死ぬにしても〈パラダイス〉です。イエスを信じ、罪赦された者は、今、イエスとともによみがえらせられ、ともに天上に座らせていただいているのです(エペソ 2:4-6)。

神の限りない恵み、あわれみ、イエス・キリストの故に、神に感謝します。